

「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」
研究成果報告書

研究テーマ（領域）名		手話コミュニティにおける遠隔コミュニケーション環境の提案		
研究総括	所属機関	大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所		
	部局	コンテンツ科学研究系		
	役職	助教	氏名	坊農 真弓
委託研究費		単位：千円		
平成21年度	平成22年度	平成23年度		
3,000	3,700	3,700		

<p>研究の概要</p> <p><研究目的> 研究の目的は、遠隔コミュニケーション技術及び超臨場感・テレプレゼンス創成技術を用いて、日本各地の聴覚障害者(以下ろう者)コミュニティに対し、革新的支援技術を提案することにあつた。国内外では、手話コミュニケーション研究と遠隔コミュニケーション技術の開発がそれぞれ別々に進められている。しかしながら、これらを融合した研究は存在しない。手話コミュニケーションにおいて、身体の向きや手の位置といった些細な身体動作は言語として必須の情報であり、遠隔コミュニケーション環境ではそれらを厳密に伝達することが望まれる。また遠隔地に対話相手がいることから違和感やコミュニケーションの齟齬を取り除かなければ遠隔コミュニケーション環境の長期的利用は見込めない。そのために本研究課題では言語学と情報学の分野を融合させ、手話コミュニケーション特有の傾向や配慮すべき点を言語学・手話通訳論の立場から検討し、遠隔コミュニケーション環境デザインに組み込むことを試みた。</p> <p><研究内容> 本研究は(1)日常会話支援、(2)学会研究会支援の2つの方法で進めた。(1)では「ろう者による読書会」(ろう者と聴者の通訳が介在する会話)を連続的に収録し、遠隔会話のしくみを捉えることを試み、また黒田の人的ネットワークにより、(株)CISCOシステムズで開発されるCisco TelePresence 3000 システム(http://www.cisco.com/web/JP/product/hs/tp/tp3000/index.html)をお借りし、実験統制下で遠隔手話8人会話と遠隔音声8人会話および1対1の遠隔対話のデータ収録を実施した(2010.9)。(2)では坊農の人的ネットワークにより、日本手話学会の年次大会をお借りし、荒川の人的ネットワークにより、他関係機関の協力を得、遠隔学会実験を行った(2009.10)。これらのデータ分析から、遠隔コミュニケーションのメカニズムを解明することを試みた。</p> <p><成果や波及効果> 主に実験統制下で収録されたデータに対し、幾通りかの分析を施した。一例として「音声会話では、視線のみを遠隔地の対話相手に向ける傾向がある。一方手話会話では、視線のみならず、身体自体を遠隔地の対話相手に向ける傾向がある。」という初歩的な結果を得た。これは遠隔コミュニケーション下での言語産出メカニズムと関係しており、各話者の言語の認知と産出に関わる結果であると考えられる。</p> <p><実施した研究の概要> 遠隔コミュニケーション技術が実現する手話会話と音声会話の実データに基づく特徴分析を実施。</p>
--